さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）

翻訳　伊　井　健一郎

一.

人間は，満足することのあり得ない動物である。もしもわれわれの祖先が，驢馬の背にまたがって，詩を吟じることに満足し，かかとを驢馬の腹にぶっつけながら，（韓愈にぶつかった…訳者）あの僧は戸を「推す」といった方がよかったのか「敲(たた)く」といった方がよかったのかを比べていたならば，今日の詩人は，新幹線に乗って20分間で，広島から椿峠[1)]までやって来ることは，あり得なかったであろう。

陸虎士（ルー・フーシ）は，生きているうちにもう一度，日本に行くことを強く願っていた。成田で飛行機をおりると，彼はどうしてももう一度，椿峠を訪ねたいと思った。だが，椿峠を訪れ，広島へ帰ろうとしている今，心にいっそう満たされぬ思いがつのってきた。気持ちのすみに空白があり，そこに重たいものがあった。「空白」に，こんなにも重さがあるとは。今，彼は「むなしさ」とも「重々しさ」ともわからぬものを感じている。

椿峠の工場の従業員たちは，この地で苦難の日々を送ったこの外国人に対し，とても友好的であった。列をなして迎え，花束を送り，お祝いの乾杯をしてくれた。様子がすっかり変った建物や機械を見てまわった。ある役員は，再三，彼に遺憾の意を表し，往時，彼にここで苦しみをなめさせたことについては，自分にもいささかの責任があると語った。実はそのとき，この人はまだ入社してはいなかった。年の頃から計算すると，彼は当時まだ小学生くらいであった。

注１）原文は椿崗で，作者の創作上の地名である。

椿峠にいる間，知人には会わなかったし，会いたい人にも会えなかった。亡くなった人もいれば，ちりぢりになって消息のわからない人もいる。当時工場にいたという年輩の２人の工員が彼を訪ねてきたが，同じ部の人ではなくて，よく知らない人達だった。また是非訪れたいと思い描いていた地も，当時の面影を見ることができなかった。都市全体が再建されていた。名前のほかには，旧時を回顧する名残りはとどめていない。

見送りの人達と別れてからも，ルー・フーシはやはり，駅に入る気がしなかった。彼に随行してくれたのは，高橋静子という慶応大学中国文学科の一女子学生だった。彼女は，日中友好の活動に参加し，そののち大学で中国語を学んだらしい。間もなく30歳になろうかというところだ。中国語が堪能であるだけでなく，彼女は，年若い娘よりも，人の気持ちがよくわかる女性だった。

「２時間後にもう１本，広島行きがありますわ。街へ散歩に行きません？もう会社の人たちもいませんから，２人で少し気ままができますわ」と彼女がいった。

彼は，喜んでこの提案を受け入れた。それにこのとき，彼は意外にも行き先きの目処をすでにつけていたのだ。左側のあの７階建の百貨店は，35年前わずか２階建の木造の「中岩百貨店」だった。向かい側には，ネオン広告で「影武者」の上映を予告する映画館がある。それは，以前は低くて，粗末だった東宝映画館の跡だ。遠くに目をやると，タワー式の高いビルの上に「高橋医院」の４文字がある。思えば，あそこには庭があって，幾棟かの平屋の小さな病院があったはずだ。

彼は静子をつれて，高橋医院の塀の外を通りすぎ，小さな路地を曲った。この通りには，高いビルはなく，２，３階建の建物ばかりで，会社の出張所が何軒かある。中華料理店が２軒，当地のみやげものの漆器[2)]を専門に売る店が１軒ある。建物は，みな新たに建てかえられている。色とりどりのプラ

2）原文は脱胎漆器。泥や木の原型の上に薄絹や麻布をのり付けし，上から漆を塗りみがきをかけて最後に型を抜き去り，色を塗って仕上げる。一閑張に同じ。

スチック瓦，大きなウィンドウ，きらきらと明るい大小のタイルでできたモダンなモザイク，そこにはもう，当時の小さな町の面影はみじんもなかった。しかし通りの木々や電柱には，紙でくくった花束がまだいくつかはさまっていた。桜まつりの名残りで，少し枯れて色あせている。そしてあかね雲に，彼は昔の椿峠を見つけたのだった。

「先生！」静子は笑いながら，あわただしい息づかいで，背後から呼んだ。「足がはやすぎて，追いつけませんわ。どこへいらっしゃるおつもりです？」

ルー・フーシは足をとめず，手を振った。

「おもしろい所にでも案内しますよ」

彼は，通りのはずれを出て北へ曲った。が，彼の予想に反し，そこは別におもしろくもなかった。そこは公園で，しかも午前中，すでに会社の人が彼を案内してしばらくぶらぶらした所だった。

静子は，彼の困惑したようすをみて，慰めて言った。

「35年もたてば，昔の面影なんてほとんど消えてしまいますわ。場所の覚えまちがえはしていませんか？」

彼は，悲しそうに首を振り苦笑した。

二.

この場所を，記憶ちがいするはずはない。

戦前，そこは映画館だった。彼が拘留されてきたときは，鉄条網の塀にくっついて，非常用水桶がいくつかあり，それには「松竹」の字が書いてあった。その建物は，幾重にも板が重なりあって，地色の木の柱で支えられていた。２階には４つの大きなベッドが並んでいて，上下にそれぞれ30人が寝泊まりできた。１階の舞台はとりこわされ，楽屋と連なって，やはり２段式のベッドが２列おかれ，また上下に30人ずつが寝られた。観客席も，食堂に改造され，長い木製のテーブルが合計２，30あっただろう。切符売り場，休憩室は，事務室に改造され，山崎や有道という寮長，舎監たちが使っていた。

庭には，炊事場がいくつかつくられ，小さな廊下で食堂につながっていた。建物の前後には，防空壕が７つ，８つ掘られていた。一番外側は，竹の垣根と有刺鉄線で囲んであり，鉄条網の入口の所には，白地に黒く「興亜寮中国人労務者宿舎」と書いてあった。

当時の彼らの通常の仕事は，どの班も12時間労働で，仕事が忙しいと「徹夜」をしなければならなかった。今朝６時に出ると，明朝６時にひける。12時間休んで，夜６時に引続き働いた。

陸虎子（ルー・フーズ）〔そのときは，まだ幼名を名乗っていた。フーシは，詩を書いてから改めた雅号である。〕は，中国人労働者の中で，一番年が若かった。満で16歳に満たなかった。彼は，炭酸マグネシウム現場の乾燥炉で働いていた。乾燥炉は，平行に走る２本の大きなトンネルで，高さが4，5m，幅10数m，長さは6,70mだ。炉頂は，ダブルアーチ型だった。ただ炉の口の上側6，7mの所は，平屋根になっていて，労働者の更衣室となっていた。

この日もまた徹夜だった。夜中の２時すぎ，原料が使い尽され，機械が止まった。労働者たちはそれぞれに，適当な片隅をさがして，寝るのだ。

「やる者はおらんか？」班長の張巨（チャン・チィュ）が一声，口をとがらせて炉頂をうかがった。何人かが上へはって行く。フーズもはい上ろうとしたが，チャンが押しのけた。

「子供の出る幕じゃない！」

「僕は見るだけです。だめですか」

「見るだけならいい，余計な口出しはするなよ。口出ししたら，親にして，とってしまうぞ」

チャンは，竹ぎれで天九牌[3)]を作っていた。夜勤のときや防空壕に入り飛行機から避難するときになると，彼は誰かを呼んで牌九（花札賭博…訳者）をするのだった。それには，各人の主食の米を賭けた。主食の米が少なくな

3）とばく用具。32枚の牌で文武に分かれ，文牌は天を最高，武牌は９枚で文牌の天に相手。

ると，人間は飢えていらだってくる。もしも確固とした，支えとすべき目標がないとしたら，人間も動物にまで堕落してしまい，生きるという本能のみに頼り，他人が生きる糧とする食べ物も自分の腹に入れてしまうことになる。そのほかに，牛馬同様に働き，牛馬同様にののしられ，たたかれたりしたら，「草原に放牧」・「軽い歩行運動」といった類の休息と楽しみは，どうしてもなくてはならないものだ。植物は，開いたり閉じたりすることができる，いわんや人間は？舎監たちにたとえみつけられたとしても，賭けをする風習を抑えることはできなかった。

フーズが炉頂にはい上ったときには，4人はもうそろっていて，それぞれの場所決めをしていた。チャンが札を混ぜてから，パチパチときった。

「どういうふうにやろうか？」

商売人出身の韓有福（ハン・ヨウフー）が言った。

「1回で飯茶碗半分，最高4杯としようぜ」

チャンが言った。

「どうやって借りを返すんだい？」

「毎晩半杯ずつ返すのさ」

「そんなのだめさ。わしはお前に30杯勝つんだ。お前のやり方だと，2か月もかかるぜ。わしが2か月も経たないうちに死んだらどうなる？　1日1杯だ！」

「腹がすきすぎると，仕事ができないぜ」

「お前は大豆を出しな，隠してるの知っているんだからな」

チャンは，東北軍の機関銃班長をしたことがあり，平漢（ピンハン）線で弾が尽き食糧がなくなって，上官と一緒に投降した。体がばかでかく，色黒でごつい男だ。恥知らずで，話が合わないとなると，握りこぶしを振りあげた。日本人は，彼を班長にした。それでハンは，彼をいくらか恐れていた。だが，この男にも，当然長所があった。彼は勇敢にも日本人にたてつき，職長に面と向かって“バカ野郎”とどなりつけたりした。中国人とは，口げんかするし，殴ることもあるが，日本人にツゲ口したりすることはしなかっ

た。

ある日，数人の中国人労働者が，夜勤のとき，暗がりで日本の職長を殴ってけがをさせた。勤労部は，犯人をさがし出せず，中国人労働者全員に罰として，神社の広場に正座させた。彼は勇敢に，その罪をかぶり，こっぴどく殴られた。事件後，班長を殴った張本人は慚愧に堪えず，こっそりと彼をたずねて礼を言うと，チャンは言った。

「君たちがやったことを認めないなら，それでもいいけどよ。俺様は，中国という2文字すら書けやしない。だがな，俺は殴られ強くできているのよ。このアニイにお礼を言う気があるんなら，一人当り何杯かの飯をくれや，そうすりゃ傷も治ろうってものよ」

彼等は，それぞれ5杯の飯をやることにし，半月間ずっと飯をやり続けた。彼は少しも遠慮せずに，全部を食べ尽した。

花札をしても，彼は勝つとは限らない。負けが込むと，名乗り出て，献血をする。献血をすると1週間は，毎日1杯余計飯をもらえた。彼は，この飯で借りを返す。年越しに，あろうことか，彼は工場の神社に供えてある餅を盗んで食べた。しかも空になった盆には糞をした。その神社は，朝鮮の徴用工の宿舎から近かったので，日本人は，中国人でなく朝鮮人がやったのだ，と疑いをかけて，何人かの朝鮮人が殴られた。

「これはお前がやったんだろう，いたずらがすぎるぞ」と彼をしかる者がいた。

「高句麗の奴等は，中国で通訳をするか，ヘロインを売るかだ。忙しくて奴等を殴るチャンスがないのさ。代って骨を折ってもらうわけだ」と言うと，他の者が言った。

「朝鮮にも，いい奴がいるぜ」

「きれ者はみんな，ゲリラに加わって日本をやっつけに行っているよ。こんな所にいいのがいるかい。俺様たちも，中国人の中じゃ，馬の骨だ。しっかり者は，とっくにきゃつらを死にものぐるいでやっつけているさ」

メシの約束を決めると，チャンは，真中あたりで札を左右に分け，親に札

をめくらせた。

「手が七，場が八……[4]」と札を分けた。彼は札を手にすると，なでてひろげて叫んだ。

「天地跨虎，金屏大五！[5]」札をめくろうとしていたときに，上がり口から一筋のあかりがさし込んできて，彼の顔が照らし出された。まずい，急いで札をおき，向きをかえて逃げようとした。そのとき，寮長の山崎は，もう炉頂の階段の所をふさいでいた。懐中電灯が一人一人の顔を照らし出した。

山崎は，中国侵略部隊で，軍曹になったことがある，典型的なファシストの悪党だった。教養は全くなく，軍国主義思想をかたく信奉しており，これまで穏やかに話したことがなく，中国人労働者をまともな視線で見たことがなかった。彼は華北労工協会が椿峠市に特別に派遣した要員であり，興亜寮では，一番位が高かった。

「札をこっちへよこせ」

チャンはお辞儀をして，札をまとめ，炭酸マグネシウムを入れる紙袋で包み，山崎に渡した。山崎は，一人一人を見まわして，階段を下りて行った。残った者は，口々に文句を言い始めた。山崎がいなくなると，叫び声が大きすぎたのだという者もおり，札を打つ音がひびきすぎたのだという者もいた。ハンは，自分がくったのが天杠[6]だったし，騒ぎがなければ，1杯半の飯をとっていただろう。こうなったら玉かきむしるぞ[7]，と公言した。チャンは腹をたたいて言った。

「くそったれ！　あいつは捕らえるのはうまいかしらんが，俺さまは腕がい

4）原文は七対門，八到底。さいころの目の数を合わせた合計点で順番を決める。親の席から数える。七は向かい側で対門，八は最も右の人，殿（しんがり）で底。

5）天，地，虎，金屏，大五は，すべて札の名前。こんな札を手に入れることが期待される。

6）天杠は2つの牌で，合計20点である。3つの川は杠（カン），4つの数字が同じだと開杠（カイカン），天成的開杠のことでもっともうかる。

7）隠語，男性生殖器にかかわる罵語。原文では，贏幾個大脖溜吧！　首のうしろを何回かなでる，という意味。

いぜ！ 明日またうまくやろうぜ。さあ，海辺にかきをとりに行こう。しこたま食わんと，こんなとりものは，気が滅入るからな」

だが行く者はいなかった。彼はどなってから，1人で，弁当箱を手に出て行った。夜が明ける前，彼は弁当箱一杯の貝[8]をかかえて，天草をさげて帰ってきた。乾燥炉の前の通用口において，熱風にじっくり当て，手づかみで大口をあけて食べた。他の何人かがくやしそうな顔をしても，彼は気にとめなかった。

「なあ，もうじき寮に帰るさ。お前たちはただ殴られただけじゃないのか？ 俺は札までなくしたんだ。俺ががっかりしてないのに，お前達が興醒めしてどうする？」

この日，仕事を終えてから，彼は普段よりもていねいに風呂に入った。班の者を全員引きつれて，隊を組んで帰った。わざと肩をゆすぶり，興亜寮の近くまでくると，舎監たちの世話と炊事場の雑役をしている娘・渡辺千代子に出くわした。千代子は「お早ようございます」と声をだしておじぎした。

「このあばずれが」チャンは，彼女をにらんで中国語でどなった。

「チョンプ　ツォウ！」(正歩走！ 歩調とれ)

千代子には，中国語はわからなかったが，チャンの怒声をきいて，お早ようの挨拶を求められているのではないのがわかった。彼女はとてもつらかった。娘は，まだ15，6歳で，日本人によくあるうりざね顔をしており，眼は大きくないが，明るく，すがすがしい印象を与えた。微笑すると，小さなえくぼが2つできた。栄養不良と過労のため，青白い顔で，女学生のように前髪を垂らしていた。つぎをあて，洗いさらしたセーラー服を一日中着ていて，一言もしゃべらず，黙々と仕事をしていた。

日本人は，寮長，指導員だけでなく，炊事場の女たちでも，彼女に用を言いつけることができた。誰が言いつけようと，まじめに仕事をした。また，誰かが叱ると「はい，はい」と答えた。そう答えるのは当然だが，人の言ったことをすべて鵜呑みにするわけではなかった。例えば，寮長の山崎がこの

8）原文は海紅。黒色蚌（カラス貝の一種）。

ように戒めたとする。こいつら中国の徴用工を哀れんではいかん。奴等は劣等民族だ。大和民族にこき使われるのは当然のことだ，と。しかし彼女は，中国人と話すときは，やはりにこにこと「張君，李君」と君づけで呼び，「きみ」とは言わずに「あなた」と言った。「支那」と言わずに「中国」と言った。そう言われるのを（中国人は）嫌っている，と聞いたことがあるからだ。だから中国人は，他の日本人に対するよりも，彼女に対しては幾分おだやかに接した。

彼等は，とても苦しい状況にあった。たとえ助けることはできなくても，彼らに害を与えてはならない。だから，規律違反とかの事実を目にしても，彼女はこれまでつげ口をしたことはなかった。彼女の兄は，中国で失踪したのだった。それで，彼女の家族は変な目でみられていた。母親は，毎日仏壇の前にひざまずいて，仏さまに兄の無事をお祈りした。母は千代子に言うのだった。

「良い事をしないと，良い報いは来ないんだよ。ここの中国人がたたかれたり，ひもじい思いをさせられるのをみると，胸が痛いよ。お前の兄ちゃんも，中国で，こんな地獄のような生活をしているんじゃないか，心配でね。千代子，中国人に悪い事をしてはいけないよ。お天道さまに眼があれば，中国で，やさしい人が兄ちゃんをかわいがってくれるからね」

千代子は，母の言うことがどうであろうと，母にそむきたくなかった。父が死に，兄が失踪したので，“売国奴，非国民”という者もいた。母1人で，弟と2人をかかえて生活するのは，容易ではなかった。広島にいる叔父がたまに，少し助けてくれるだけで，他には誰も，彼女たちを助けてはくれなかった。彼女は，母に悲しい思いをさせるわけにはいかなかった。

彼女が興亜寮の前まで来たとき，山崎さんが事務所の入口から出てくるのが見えた。顔には凶悪な雰囲気をただよわせていたので，彼女は，あわてて，頭を垂れ，急ぎ足で炊事場へ駆けた。興亜寮では，毎日のように中国人労働者が殴られた。彼女は，その場に出くわすと，うなだれてすぐに目をそむけ，そっと出て行った。いためつけられる人に同情し，またいためつける

者の身になると，恥ずかしさを覚えた。

頭を垂れても，耳をふさぐことはできない。

さっき彼女をにらんだ中国人が報告した。

「乾燥炉現場の７名，全員そろいました。号令！」

「一二三四五六」

６番目の声は，小さなオンドリの鳴き声のようで，変声期の男の子の声だった。

彼は，中国人労働者の中で，ただ一人，彼女と年の頃が同じ位で，話が合った。本当に小さな虎のようで，目は大きく，口の輪廓がはっきりして，またのろまで不器用なさまは，愛嬌があった。彼女の前では，大人ぶって，まじめに振舞った。しかし，彼女を見くびることはせず，会うと決まって，まっ先に声をかけた。

まずい。山崎さんが彼らを殴り始めた。まずパチーンという音。顔をたたいておいて，質問した。

「なぜ殴られるのか，わかっとるか？」

「わかっております」

一人一人と殴り続けた。彼のところまでまわってくるのだろうか？

「わかっとるか？」

「わかっております」

「わかっとるか？」

「わかっております」

千代子は，彼までまわってくるのではと心配して，みぞおちの辺が脈打った。うなだれたままで，建物の曲り角まで走り去ったとき，答える声が変わった。小さなオンドリが叫んだのだ。

山崎が「わかっとるか？」ときくと，

あのか細いのどが大声で「わかりません！」と答えた。

「パンパン」とびんたが２つとんだ。

「気をつけ！ 答えろ。わかっとるか？」

「わかりません！」か細い声は震えた。

「パンパン」

千代子は，その場を動けなくなった。彼はまだ子供だ――自分よりもまだ年下かもしれない。こんなにたたかれて，どうして耐えられようか。どんなまちがいがあったというのか。彼は皆に好かれており，日本人指導員有道さんも彼に特別なはからいをしているんじゃないの？ 毎回病院に行ったり，雑用をしたり，一人で街に行く用事は，いつも彼にさせているんじゃないの？ それなのにどうして，誰もとり成してやらないの。

「わかっております」と「わかりません」は，敬語で，尾音にちょっとしたちがいがあるだけだ。ルーの発音は，正確でなく，ぼかされたかもしれない。彼は「わかっています」と答えたかったのに，口から出てきたのが「わかりません」だったのではなかろうか。どうして誰も彼に一言の注意を与えないのか。どうして彼が殴られるのをほっておくのか。千代子は，勇気を出し，ふり返って，事務室の方へ向かった。チャンスをみて，フーズにちょっと気づかせようと思ったのだ。事務室まであと十数歩という所で，山崎が顔をあげて千代子をにらんで，嫌悪の情を表わして言った。

「お前何しに来た？」

「はい」千代子は立ちどまって，ちょっと頭をさげた。「朝御飯のことをおききしようと思いまして……」

「あっち行け，今どき何の朝飯だ？」

幸いに，有道さんが出勤してきた。有道不二男は「指導員」で，年のころは20歳前後だった。背が低く，中国で作った国民服を着ていて，ゲートルを巻いていた。戦闘帽のつばは，指でつまんだために上を向いていた。近視の眼鏡をかけ，高校生のようにもみえた。彼は両親と一緒に，南京（ナンチン）に住んでいたことがあり，江蘇（チアンスー）なまりの中国語がかたことしゃべれた。日本語よりもききとりにくく，こっちがわからないとなると，すぐに怒るのだった。彼は，これまで人をたたかなかった。冗談で言うのは別にして，あんまり人もののしらなかった。中国人労働者たちに，必要な日本

語を教え，また日常生活のこまごました事の面倒をみた。彼は，山崎の部下だが，山崎本人に対しては，強い反感をもっていた。

中国人労働者にはよく働いてもらいたいので，なんのいわれもなくひどくいじめたり，体力をとりもどすための休息すら与えぬ，と会社側は言っているのではない。彼は陰でこう説明した。また中国人労働者の主食の米が，労工協会の人たちにあまりにも横取りされたことに対して，不満をもっていた。中国人労働者は，食べ物が少なすぎて，仕事をしても充分に力を出すことができなかった。それでも会社側は，有道を責めた。彼は，とてもくやしかった。これらの事は，山崎の一存で決めるのだから，彼には言う権利がなかった。

有道が，様子を見て，何事かとたずねると。チャンが報告した。

「僕たちは，工場で賭けをしました……」

山崎は，ルー・フーズを指しながら言った。

「どうして殴られたのか，わかっとるか，と奴にきいたんだ。なんと，わからんと言いよる，反抗の意思があるんだ」

ルー・フーズが言った。

「報告します。僕は賭博に加わりませんでした」

山崎はチャンにきいた。

「奴は加わらなかったのか？」

「はい。加わっていません」

「うそつけ。わしはこの目で，お前がその場に居たのを見たんだ」

「彼は，そばで休んでいたんです。賭けていません」

「なら，なおさら殴ってやろう！」山崎は，ルー・フーズに近づいて，一気に6，7回横っ面を張った。

「奴らが賭けたのを見ただろう！ お前は，俺に報告したのか。どうして報告しなかったんだ。えっ，どうして……」

1988年6月　伊井健一郎：さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）

三

中国人労働者の賄いは，一体，量が決まっていたのか，どれだけの量だったのか，知っている者はいなかったし，あえてたずねる者もいなかった。椿峠に着いたあの日から，毎食お碗一杯だった。一杯といっても，なっぱすら見えない塩気だけの汁だった。肉は見たことがなく，卵もお目にかかったことがない。たまたま魚にありついたとしても，まるで小便桶からすくってきたばかりのように，“アンモニア”が鼻につんときて，目もあけられないくらいだ。ここ何か月来，賄いはますますまずくなってきた。飯は，依然として毎食一杯で，すでに米と野菜半々に変わっている。中にはカボチャ，さつまいも，大根ありで，各種の野菜がまざっていた。一杯の飯から野菜を取りだしたあとには，米粒の御飯は2口も残らない。

しかし，山崎たちの食事は，警察官や憲兵さえもがうらやむほどだった。彼等は，1食うかせるために，たびたび“興亜寮”に見回りに来た。日本は，副食品が不足していたが，山崎たちは，かん詰め，塩づけ肉の干物，落花生，汾酒，栗ようかんを労工協会の名義で，たえず中国から運んできた。それを彼らは自分で食べ，また役所の役人に，付け届けとして用だてた。山崎は，日本では普通の職員にすぎないが，その生活ぶりは，高級技師よりもさらに優雅であった。有道は，陰で，彼が“中国で金をもうけている”と言っていた。

千代子が炊事場にくると，すでに食事の用意が始められていた。中国人労働者たちは，もうひもじさのために，食堂のまわりをうろついていた。ベルの合図があり，すぐに列を組み座席に着き，食前の訓辞を読み，黙とうする，等の一連の儀式が始まった。

チャン達の班の者が食堂に入ると，訓辞はすでにおしまいの方を読み進んでおり，急いで壁ぎわに立ったままとなえ続けた。

「天皇の賜わった食べ物に，感謝します……」

「黙とう！」

両手をひざにおき，両目をつぶっていると，条件反射的に，胃の活力が急に増し，たちまち全身が疲れて，力が抜けていくのだった。ただ口・食道といった，食べることと関係のある器官だけが，格別に興奮し，口はにがく，かわいていた。食道がひとしきりひきつけて，唾をのみこもうと思っても，のみこむつばがなかった。「ナムアミダブツ……」やっと「黙とう終わり」という号令が耳に入った。部屋全体の者が，同時に，ほっと一息ついた。

といっせいに，手を伸ばして，自分の飯茶碗とはしをひったくった。動作のはやい者の所からは，もう汁を吸う「ズルズル」という音がきこえてきた。チャンたちは，急いで自分の席につきながらはしをとった。このとき，渡辺千代子が空っぽの盆をもってやってきて，低い声で言った。

「ほんとうにすみません……」

「何事だい？」皆がたずねた。

「山崎さんの命令で，皆さんの御飯をもってくるように，と言うのです」

この言葉は，まるで電気に打たれたような衝撃だった。感電したかのように，伸ばした手をまた引っこめた。チャンは，ふんと一声たてて立ちあがった。

「行こう，寝に行こうぜ」

他の人たちも続いて立ちあがった。しかし千代子は，こっそりと手で入口の方を指さした。

「皆さんは，ここで，他の人が食べるのを見ているように，そのあと茶碗とはしを片付けてから休むように。山崎さんの命令です」

遠くで山崎が冷笑しながら，こちらをにらんでいた。やむなく，また腰をおろした。千代子は，心のうずきが顔いっぱいに現われ，じっとうなだれて，テーブルの御飯を一つ一つ盆に取った。口の中では，たえず小さな声でつぶやいていた。

「ほんとうに，ほんとうにすみません……」御飯はみんな，盆の上に並んだ。彼女は，それぞれの人の前にある汁を指して言った。

「これは，あとでお碗を持っていけばよいのです」

1988年6月　伊井健一郎：さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）

「くそったれ！」チャンは大きく目をむいて，目の前の汁茶碗を壁めがけて投げつけた。ガチャンという音に，部屋中の人が驚いた。

フーズは腹をたて，くやしかった。山崎に対して，どれも実現することはないにしても，幾種類もの報復の方法が頭をよぎった。懸命にこらえていた言葉が，入口の方へ向かってはなたれた。

「お前の言うことなんかきくもんか。俺さまは，ばくちなんかしていないのさ。それをお前は殴ったじゃないか。わざと賭けたんだと？　どうして俺が賭なんかせんとならんのだよ！」そのときだった，ガチャンと大きな音がして，茶碗が投げられたのは。彼は，はっと我にかえった。山崎が怒りを表わして近づいてきた。

「誰だ？　何事だ？」と声の調子を荒げた。

このとき，千代子が彼の前を遮り，わきに立った。

「ごめんなさい。茶碗を多くのせすぎまして，ひとつ落としてしまいました」

「このばいたが」山崎は，千代子の髪をつかんで，前後に何回も引っぱった。

「下司な奴，裏切りのろくでなし，いんばいめが……」

千代子は，一声も出さず，彼のなすがままに引っぱられた。山崎がその場を離れると，うなだれたまま，だまって炊事場に入っていった。

人々は，次々とはしをおいて，食後の祈りを始める号令を待っていた。チャンのそばに座っていたのは，同じ職場で硝酸カリウム現場の工員・宋玉珂（ソン・イュコー）だった。この男は30歳前後で，口数は少なかったが，中国人労働者の中では，すこぶる信望があった。彼はチャンの服を引っぱって言った。

「片付けるときに，俺達の班の茶碗に気をつけてくれよ」チャンがかたわらを見ると，幾人かの者がわざと残した二，三口の飯を汁の中に入れてくれていた。彼は感激して，ソンの手をにぎった。

チャンは，賭けやけんかではそっぽを向いて冷たいが，こうしたときに

は，また別の尽度(ものさし)があった。茶碗とはしを片付けるとき，彼は班の他の者に言った。

「ソンさんの班の仲間は，とても男気が強いぞ。お前たち，ありがたく食べな」

彼自身はというと，遠くへ行って，他のテーブルの茶碗とはしを片付けた。同時にテーブルの上にこぼれた飯粒，お碗の残り汁を貪欲に口に入れた。だがこれっきしの物を腹に入れても，飢えを満たすわけにはいかず，逆に強い食欲をかきたてられた。部屋に戻るや，彼は山崎のことをさんざんにののしり，服[9]を脱いで，頭上にかざした。

「誰かサツマイモか大豆を持っとらんか？ 換えるで，大豆5合とかえるで」

誰も応えなかった。彼は，ハンの寝床の前までやって来て，掛け布団を一気にめくった。ハンは，思っていたとおり，布団をかぶって寝たふりをして，こっそり大豆を食べていた。

「男気を出して，何合かと換えてくれよ」

ハンは，背たけの小さな，サルみたいな顔だちの男だった。だがどんなやり方で，後家さんとなれあいになったのか。その後家は，いつも彼に食べ物をくれた。それにこの部屋の者は，しょっちゅう物をなくしていた。タオル，石けん，洗って干してあった木綿のくつ下，つぎをあててあるがまだ着られる古ずぼんなど，またたく間に消え失せてしまうのだった。人々はその頃，黒く染めてその後家が着ているのを目撃した。でも彼女は，ハンがくれたものだとは認めなかった。皆は，ハンを恨みに思ったが，こらしめる手だてがなかった。それゆえ，チャンが彼をゆすっても，誰もとめには出なかった。

ハンは，体の向きをかえた。

「騒ぐんじゃないよ，夜なべ仕事をしてきたんだ，俺は寝るぞ」

「お前，何の仕事をしたんだ。あの日本の女とうまいことやったんだな。大豆をよこせ，4合だ，服はお前にやる。お前のおっかさんにさし上げてこ

9）原文は協和服。中山服，人民服の類。

いよ」

「俺はもってないよ」

「お前，面倒かけさせるなよ」

「俺はお前さんの服などいらないよ。1合貸すことにしようか。ただし弟分は，もうちょっと丁寧に扱ってくれんもんかね」

「くそったれ，俺さまはみついでくれるお方がいないんだ，だから借りても返せやせんのだよ。交換でなくてもいいさ。俺たち，さいころを振ろうぜ。俺が勝ったら大豆をくれ。負けたら服はお前のものだ」

言い終ると，チャンは自分の寝床にもどり，むしろをめくった。彼は自分が歯ブラシの柄でみがいて作った小さなさいころをさがし出し，無理矢理ハンの手につっこんだ。

「振るんだよ，大きいのを出せ[10]，一振り大豆1合だ」

「お前ときたら……」

「早く，お前が振らんと他の者に振らせるぞ。負けたら，お前が大豆を出すんだ」

「他の人をさがしてくれ，俺は振らないよ」

「フーズ，お前奴の代りに振れ」

フーズは，賭けに加わろうと心に決めていたところなので，すぐにくるりとはね起きると，さいころをつかんだ。

「いっちょうやるか」

チャンが彼のほおに平手をくらわした。

「お前みたいな子供が，何を賭けるんだ？ ハンの代りに振るだけだ」このとき，まわりで見ている者は人数が増え，ざまをみろという態度で言った。

「お前が賭けるんじゃないぞ。ハンに代って振るだけにしな。勝ったらチャンのもの，負けたらハンのものということだ！」

フーズはやむなく，さいころをふって投げた。眼候[11]だった。みんなは，拍

10）原文は赶大点，一種の賭け方で，投げた数字の多い者が勝つ。
11）（原注）一つの点，最小の数は眼候という。

手をしたり笑ったりした。ハンに大豆を出させる，ということだった。

「文句言いっこなし，さあ，大豆を出さなきゃな」チャンは，ハンが動くのを待たずに，立ちあがってベッドの所に行き，手を伸ばしてベッドの柱に掛けてある肩かけかばんを取った。ベッドの棚から，小さな白い茶碗をとり，よく炒った大豆を1合すくって，自分のポケットに入れた。幾粒かつまんでフーズに与えた。

「お前にも少しおすそ分けだ」

ハンは，かばんを奪い返して，また布団を頭までかぶった。皆はまた笑った。このとき，有道が入口で軽くせきばらいをすると，人々はすぐに口を手で覆って，自分の寝床にはって行った。有道は，物音がしなくなってから入って，チャンのベッドのそばに来て，彼を軽くたたいた。

「山崎さんが来るように，言ってるぞ」

チャンはあわてて起きあがり，有道について行った。

ハンは手を伸ばして，チャンが落としたあのさいころに触れた。彼は心中思いをめぐらせて，そばのフーズをつついて，その枕元に頭をよせて言った。

「おい，この大豆は，お前が負けたからだぞ。お前が俺から大豆を1合借りたことにするからな」

「僕は代りに振っただけだよ」

「あれはチャンが言ったんだ，俺は，いいとは言わなかったぜ，俺が賭けるんだったら，お前に振らせたりするもんか」

「僕は大豆を持っていませんよ。あんたに何を返すんですか？」

「飯で返してもいいぜ，飯一杯だ。夜，俺にくれよ」

「僕は，今日の昼も食べていないんだ，夜またあんたにあげたら，仕事にかかれるわけないでしょう」

「まず半分返せよ，夜食に半分返せ」

「いやですよ」

「じゃあな，俺たちはもう一度さいころを振ろうぜ。お前が勝ったら，チャ

ラにしようぜ。俺は今日はつきが悪い，大方のところ負けるってことさ」

フーズは，丁度，山崎に報復しようとしていたので，すぐに承知した。2人は布団を頭までかぶり，物音をたてずに枕元まではいあがって，さいころを振った。ハンは，フーズが若僧だと甘くみて，ちょっと小細工をした。チャンが帰ってきたときには，フーズはすでに飯5杯分負けていた。ハンは，チャンに邪魔されるとやばいと言って，もう賭けようとはしなかった。

だが帰ってきたチャンは，彼らに気付くようすもなかった。山崎が，罰としてチャンに仕事をさせることにしたからだ。それは，自分の情婦に米をとどけてやることだった。女は朝鮮人で，夫は，かつて山崎と同じ部隊にいた。うわさによると，戦死したという。山崎は，負傷して退役し，戦友の家族の面倒をみるという口実で，そそくさと同棲を始めた。彼が何人かの者とともに，中国人労働者の食糧をピンはねしているのは，半ばおおっぴらであり，食糧を差し押えては，大半は家にとどけ，その一部を女にまわすのだった。

チャンは，半俵の米をかついでそこへ向かった。が，考えれば考えるほど，腹がたった。奴は俺を殴っておいて，おまけに自分のめかけに禁制品をとどけろという。あまりに理不尽だ，あまりにも弱い者いじめがすぎるというものだ。奴が俺の主食をピンはねするなど，大それたことを平気でやるなら，俺はこっそりと，また持ち帰るだけさ。……チャンは途中で，俵を引きさいて，靴下を脱ぎ，靴下2つに米を入れて茂みにかくした。米はちゃんとかくしたが，米の入れ物を作らないとだめだ，と思った。その靴下は，とっくにかかとがすれていたので，興亜寮まで持ち帰るのは，容易ではなかった。朝鮮女の所に着くと，折よく台所の入口に，半分仕上がった慰問袋[12]が置いてあるのが目にとまった。チャンは，少しも遠慮せずに，それをふところに押しこんだ。道中，靴下の中の米を袋に入れかえた。それを建物のうしろ側の竹の柵に隠すと，手ぶらで事務室に行って，外出証を渡し，便所に行

12）出征兵士などを慰めるために，中に娯楽物・日用品などを入れて送る袋。（広辞苑）

くふりをして，また建物のうしろまでまわり，塀の所からあの米袋を引っぱり出してきて，服でくるんで部屋まで持ちかえった。彼は大急ぎで，わからないように隠した。ハンとフーズがさいころを振っているのに気がつく余裕など，あるはずもなかった。

（未完）

訳者あとがき

83年夏，中国知識人の日本回想『わが青春の日本』（東方書店）を読んだ。その中に鄧（トラン）友梅（ヨウメイ）氏の名文もあり，深い感銘を受けた。そして鄧友梅氏に手紙を書き送った。

85年12月，鄧先生から作品集≪京城内外≫（613頁）が送られてきた。ところが雑事にかまけてゆっくり読むこともなく，1年が過ぎた。今回読み進むうちに，本書の一篇に取り付かれて，あえて翻訳して，できるだけ多くの読者に読んでいただくことを決意したわけである。

それは，一中国人が体験した日本の一都市の出来事にとどまらず，わが国の敗戦に至るまでの現代日中関係史の1頁を表現しているように思われた。

作品の原題は，「早逝的愛」（とっくに過ぎ去りし愛）で，82年10月，中国青年出版社から出された。日本人と中国人の間にあった憎しみの根源を示し，今日まで続く友情をたたえる小説である。同時に，それは当時の日本社会をするどく描写し，軍国主義を告発したノンフィクションの部分を色濃くもっている。

ある人々は，今日のわが国の情況を，戦前に類似したものとみる。反戦エスペランチスト長谷川テルの娘劉暁蘭は，「母の時代に急に戻っているみたい」と語る。（「毎日新聞」87．5．8）戦争に向かっていった歴史の再現を感じさせるともいわれる20世紀末の今日の日本で，人類の不幸を招いた戦争をくり返し考えることは，極めて大きな意義のあることだ。

1988年6月　伊井健一郎：さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）

作者もその一人だったが，中国から「養成工」として，徳山に連れてこられたのは，170名だった。19年2月，第1次の30人から，2次，3次と続いて来たが，工場が爆撃されて動かなくなったので，20年6月，中国へ引揚げた。彼らは，興華隊と呼ばれた。（中元氏のメモによる）

また朝鮮半島からも150名ほどが来ていて，これは忠誠隊といわれ，より危険で，より熱く，またより寒い所の作業をさせられた。（塩谷氏の証言による）。当時は，日本人労働者もつらかった。12時間労働が普通だった。昼5日，夜5日という具合に働き，交替日には，18時間働かされた，と中元氏は語った。

戦争も末期になると，わが国では「華人労務者内地移入」の決議が実行された。「兎狩り作戦」といって，第59師団の「十九秋山東作戦」（1944年）によって，これらの人たちは，働く動物として，連れてこられたものと思われる。（石飛仁“中国人強制連行の記録”太平出版社，1973年参照）

思いおこすことさえつらく，悲惨な出来事の一つ一つである。作品でも描かれているが，これらの中国人は，青島で，日本政府とかいらい政府のつくった華北労工協会に捕えられた。それは，表向きは募集することになっているのだが，実際は強制的に拉致し，奴隷扱いにするのだった。（猪瀬建造，足尾銅山中国人強制連行の記録――“痛恨の山河”1974年）

敗戦の色濃い昭和20年になると，日本軍は，狂気の沙汰に出た。昭和20年7月中旬，「度胸試し」という上官命令で，「無抵抗の中国人を殺した」ことについて，42年ぶりの告白がされた。大阪の「アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いをはせ，心に刻む集会」でのことである。（「毎日新聞」87．8．16）。こうした史実は，後の世まで正しく語り伝えていきたい。被害者としてのみでなく加害者としてのいまわしい歴史を振り返り，それを肝に銘ずることなくして，平和な日本と世界の未来はあり得ない。

私たちは，自らの町や村の歴史を意外に知らない。今年もNHKは，明石空襲や北海道の空襲の模様を紹介した。とても良い，教えられることの多い

番組だった。

当時人口７万人の徳山市でも，２回の空襲があった。昭和20年５月10日，第３海軍燃料廠，大浦貯油所，徳山鉄板工場といくつかの地域に爆弾が投下された。将兵，工員，動員学徒，市民など，燃料廠の死者五百数十人，重軽傷者約千人といわれ，燃料廠の大半が失われた。

ついで７月26日，夜10時より約１時間にわたり，第２回空襲。B29編隊の４回にわたる波状攻撃をうけ，市街地の90％が焼失した。戦災家屋4,622戸（うち全焼4,590戸，半焼32戸）。被災人口16,512人（うち犠牲者482人，負傷者469人）にのぼった。焼夷弾，小型爆弾，機銃掃射の反復攻撃をうけたのだった。（建設省編『戦災復興誌』都市計画協会，昭和33年。市役所『徳山市史年表』1969年。山川国治他『山口県の百年・県民百年史35』小川出版社，1983年。徳山の空襲を語り継ぐ会『街を焼かれて，戦災40周年徳山空襲の証言』1985年）

鄧（トヲン・ヨウメイ）友梅氏は，19歳で見習記者となり，散文を書き始めた。1951年，処女作「成長」を発表，53年文学講習所に入り，張（チャン・ティエンチ）天冀について学んでいる。師匠は，“文作り”の養成を“人作り”の養成から始めた。

「成長」を書くに際しては，趙（チャオ・シュリー）樹理の激励があった。青年たちは，酒気と日本の三味線のかなでる山西小歌の中で，チャオの文学啓蒙教育を受けた。（≪鄧友梅短篇小説選≫自序）

鄧氏は，少年時代に，軍隊の文工団に加わって，多くの活動をした。1957年，右派として批判され，文学活動を中断せざるを得なくなり，実生活で幾多の辛苦をなめた。20年間の空白の後，78年から85年１月までに，100万字以上の小説や散文を書いた。（『人民中国』85年５月号）。これらは多くの読者の支持を受け，５回も受賞している。

85年１月の作家協会第４回大会は，2,515人の会員のうち704人が理事選挙の投票をした。鄧友梅氏は，巴金（バーチン），張光年（チャン・コアンニエン），劉賓雁（リウ・ビンイエン），王蒙（ワン・モン）につぎ，５位で当選した。理事は，合計236名である。氏はまた，協会書記処書記９名の

1988年6月　伊井健一郎：さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）

うちの1人でもある。（『中国研究月報』85年8月号，450号。中国作家協会≪第4次会員代表大会文集≫1985年）中国で，書記処は権力を行使するところであるが，彼は自ら「お役人にはならない」と語っている。

日本と縁の深い鄧氏は，作家の友人も少なくない。中野孝次，黒井千次，宮本輝，水上勉の諸氏がおり，また83年，野間宏氏ら5人と，日中作家座談会を開いた。（季刊≪日本文学≫'83.3期，吉林人民出版社）

徳山で，苦難の日々を過ごして以来，今日まで続く友情は，今後さらに深く，大きくなるであろう。氏の指導員だった中元幸廣氏は，日中友好協会（美祢市）の理事・事務局長として活躍され，今では鄧氏と兄弟のようなつき合いをされている。（「中国新聞」84.4.16夕刊「朝日新聞」85.8.23）中元氏の手になる「美祢だより」は，20号になるが，日本と中国の身近な交流のようすを伝え，友好の輪を広げている。

浜田ミツ子さんは，壮行会まで開いて歓送してくれた同僚たちの友情をたずさえて，北京の鄧氏を訪ねた。（「読売新聞」85.6.18）。西村百合子さんは，是非北京，シルクロードへの旅を実現したいと語った。

この作品を，鄧氏は80年日本より帰国後，11日間で書きあげた。中国語で8万字であり，驚くほどの早いスピードで書いたものである。演劇家の日笠氏は，それを劇にして公演する決意をされている。（≪煙壷≫后記）日本の敗戦前後の様子を生き生きと描写した外国人の初めての作品だと，日笠氏は言われている。

このようなすばらしい作品を翻訳するには，訳者は力不足であった。鄧氏の魅力を伝え，歴史の勉強をしたい一心で，あえて訳稿を作った。理解不十分な点，誤解していた箇所など，読者諸兄姉の御教示をいただければ幸いです。（1987.9.18）

〔付記〕訳稿は，14章280枚であるが，紙幅の関係で，最初の3章40枚だけ

を紹介した。鄧先生には，御多忙のところ2，3回お手紙で，語句の説明などをいただいた。深く感謝致します。

作品で有道という名で登場する中元氏は，今年2月から6月まで北京語言学院での留学生活を送られている。中国語と中国文化を学ばれ，帰国後は，ますます熱心なお仕事をされるでしょう。

日本と中国には，不幸な歴史があった。今後，お互いにより理解し合ってはじめて，友情は広がり深まるでしょう。

なお，ご参考までに，末尾に主な登場人物，内容概略および昭和10年の「市街図」の一部を載せた。一日も早く全文のご紹介ができれば，と思います。(1988.3.23，3月31日退職)

≪主な登場人物≫

陸虎士（ルー・フーシ） 主人公の現在，80年来日

陸虎子（ルー・フーズ） 主人公の幼名，元羊飼い

高橋静子　慶応大学中国文学科学生，フーシに随行

張巨（チャン・チィュ） 炭酸マグネシウム班長

韓有福（ハン・ヨウフー） 商売人出身の徴用工

山崎　元軍曹，興亜寮の寮長

渡辺千代子　炊事場の雑役，フーズと親しい

有道不二男　寮の指導員，20歳位，殴らない人

宋玉珂（ソン・イユコー） 硝酸カリウム班長（元教員，武工隊員）

伊藤賢二　反戦同盟，今沖縄に在住

趙大成　武工隊長

フーズの姉　抗日青年先鋒隊員，夫は日本軍に殺された。

八卦の老人

吉田老人　眼鏡店の主人

千代子の母

次郎　千代子の弟

1988年6月　伊井健一郎：さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）

出っ歯　工員，30歳位，台児荘戦役で片足なくす。

村岡　工員，20歳位の健康体，友好的

勤労部長

花枝子　ハンと関係ある女

薬品部主任

警察署長

漢方医の老夫婦

小僧　旅館の従弟，18,9歳，野川君という。

村上のおばあさん，おじいさん　山の持主

橋本のおばさん　炊事婦

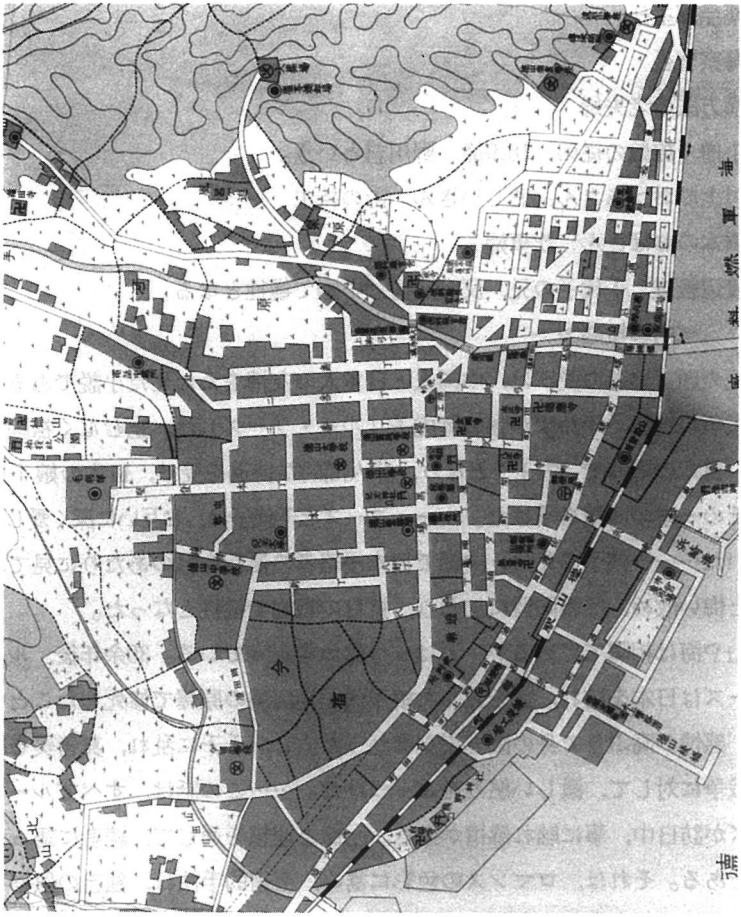
渡辺義雄　千代子の兄，反戦同盟，中国で犠牲となる。

≪内容概略≫

元の題「早逝の愛」は，中国人と日本人の友情をたたえた小説である。抗日戦争の時期，年わずか16の陸虎子（ルー・フーズ）は，止むなく祖国を離れ，日本の椿峠で“労工”となり，非人間的な待遇を受け，日本の娘千代子とその一家の同情をうけた。ルー・フーズと千代子は，お互いに深く愛しあっていた……千代子の兄は，中国で日本侵略者の暴行を目のあたりに見て，翻然と悔い改め，反戦同盟に加わり，抗日の戦場で犠牲となった。

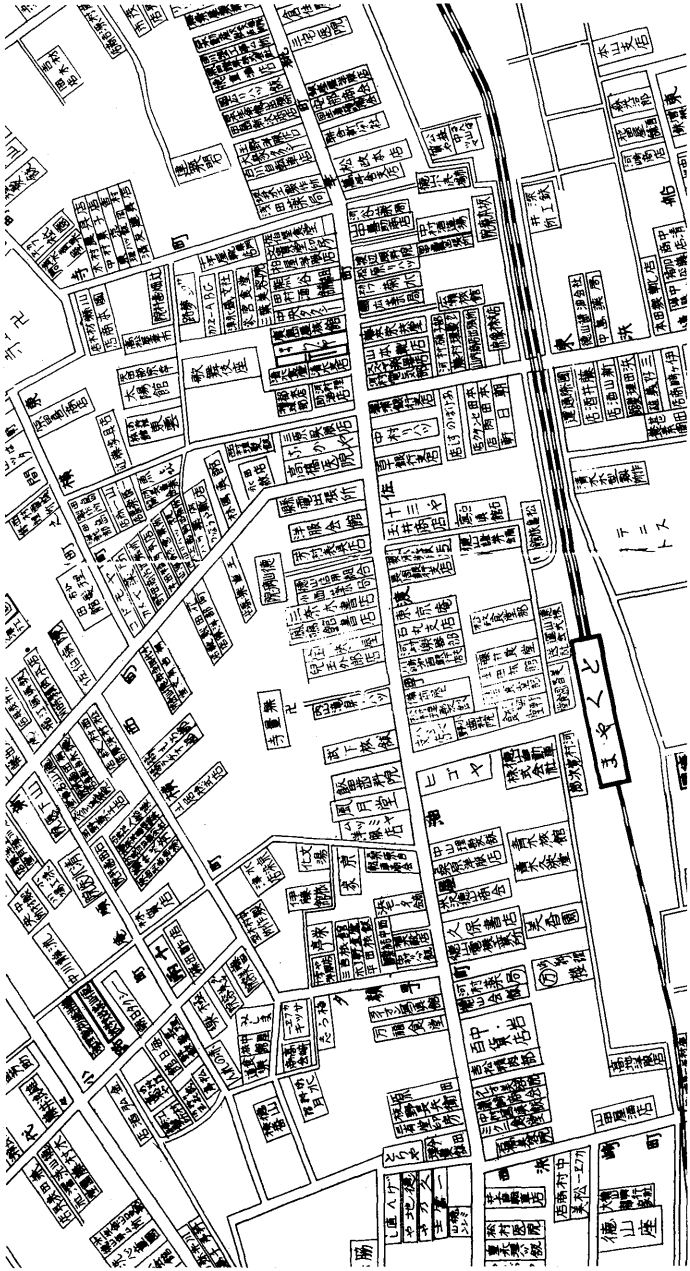
山や海は相隔てているが，天は一つにつながっている。30余年後，ルー・フーズは日本を訪れ，彼を愛した娘千代子が広島の原爆で惨死したことを知り，感情の高ぶりで身の置き場がなかった。心が千千に乱れ，真善美を葬った戦争に対して，激しい怒りをぶっつけた。……この話は，すべてルー・フーズが訪日中，事に触れ感情が動き，回憶と連想を通じて，読者に語ったものである。それは，ロマンスの色彩に富み，芸術的手法は，独自の風格を備えている。（'82. 10，中国青年出版社の紹介文より）

『徳山市街図』の一部分



昭和10年徳山商工会発行（昭和57年マツノ書店復刻版発行）

1988年６月　伊井健一郎：さらば，瀬戸内海！（鄧友梅・作）



徳山市街図（市制施行 昭和10. 10. 15現在）の一部分

『目でみる徳山の歴史』（昭51，青年会議所）